

86. Persistent primitive trigeminal artery
本幹部動脈瘤の1剖検例

藤井 幸彦・川崎 昭一 (佐渡総合病院
脳神経外科)
阿部 博史 (新潟県立中央
病院脳神経外科)
山田 光則・吉田 泰二 (新潟大学脳研究
所神経病理)

Persistent primitive trigeminal artery (PTA) は最も多く認められる遺残胎児期動脈であるが、その本幹より発生した動脈瘤の報告例は少ない。PTA より発生する動脈瘤の成因には、従来より PTA の壁の脆弱性が大きく関与していると言われて来たが、我々はクモ膜下出血で発症した PTA 本幹の動脈瘤を経験し、その肉眼的、病理組織学的検索を所得したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症例は75歳、女性。昭和58年11月13日突然の意識消失で発症し、同日来院。入院時神経学的には、軽度意識障害、頭痛、悪心嘔吐、項部硬直以外神経学的異常所見なし。CT では rt. ambient cistern を中心にクモ膜下出血が認められ、脳血管写にて右内頸動脈の C4 部より脳底動脈にかけて PTA が描出され、その本幹に嚢状動脈瘤が認められた。種々の条件より待機手術としたが、その期間中に再破裂を来し死亡した。

87. 後下小脳動脈末梢部動脈瘤について

椎名 巖造・作田 善雄 (長井市立総合病院
脳神経外科)

椎骨脳底動脈系の脳動脈瘤は、全動脈瘤の約3~15%と言われ、脳底動脈分岐部に好発するが、その10~20%は後下小脳動脈に発生している。この後下小脳動脈瘤のなかでも約2/3は椎骨—後下小脳動脈分岐部にみられ、後下小脳動脈末梢部の動脈瘤は全頭蓋内動脈瘤の1%以下と報告され、非常に稀なものである。

われわれは今回、脳室内出血で発症した54才女性の右後下小脳動脈末梢部動脈瘤を経験し手術的に治癒せしめ得たので発表するとともに、この部のアンギオ所見、CT 所見を文献的に考察したので報告する。

88. 多彩な症状を呈した細菌性脳動脈瘤の
1例

須賀 俊博・高橋慎一郎 (国立水戸病院)
園部 真・甲州 啓二 (脳神経外科)
富永 悌二・桑山 直也

症例は44才、男性。主訴は頭痛と視野狭窄。昭和59年8月微熱と全身倦怠感出現。同年10月当院内科で、僧帽

弁閉鎖不全症及び細菌性心内膜炎の診断で加療。同年10月24日頭痛、視野狭窄出現、当科転科、意識清明、両側うっ血乳頭、右上同名半盲あり、動脈血培養で α -streptococcus 検出。脳血管写で左中大脳動脈末梢に動脈瘤、左後大脳動脈の閉塞あり、次いで同年11月16日左片麻痺出現、脳血管写で右中大脳動脈本幹の閉塞と前大脳動脈末梢に動脈瘤を認めた。同年11月21日、くも膜下出血発症、右頸動脈写で中大脳動脈閉塞部にあらたに動脈瘤がみとめられた。続いて12月1日再びくも膜下出血発症。脳血管写では中大脳動脈閉塞部の動脈瘤は造影されず、前大脳末梢の動脈瘤も消失していた。又、以前閉塞していた左後大脳動脈はすでに開通していた。最初の脳梗塞3ヵ月後に施行した脳血管写で、左中大脳動脈末梢部の動脈瘤も消失していた。

89. 外傷性前大脳動脈瘤の5症例

天竺 雅春・藤木 俊一 (東北大学脳研
究所脳神経外科)
亀山 元信・鈴木 二郎 (仙台市立病院
脳神経外科)
小沼 武英 (国立仙台病院
脳卒中センター)
桜井 芳明 (市立酒田病院
脳神経外科)
奥平 欣伸

我々は外傷性前大脳動脈瘤5例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。症例は小児3例、成人2例で外傷は閉鎖性4例、開放性1例であった。来院時の意識は0~200とさまざまであり、動脈瘤の破裂は3例に認められ、外傷から動脈瘤と診断されるまでの期間は2日から34日であった。動脈瘤の発生部位は callosomarginal artery 分岐部近傍3例、frontopolar artery 1例、A₂ 1例であった。手術は4例に施行され、3例が good、1例が fair であった。非手術の1例は頭蓋底骨折を伴い、大量の鼻出血により死亡し、剖検にて動脈瘤が確認された。さて外傷性前大脳動脈瘤は自験例を含め42例の報告があり、A₂-A₃ 部で callosomarginal artery 近傍に集中している。その発生機序として大脳鎌による直接損傷の他、脳の移動で分岐がひっぱられることも考えられた。またその診断では受傷早期の CT で大脳半球間の高吸収域、脳梁出血が重要な所見と考えられた。